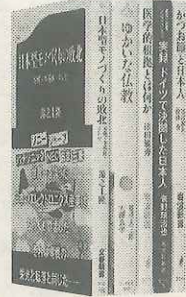


新書  
の窓

4



## 零戦と半導体その栄光と凋落

日本の家電・エレクトロニクス産業はなぜ凋落したか。湯之上陸『日本型モノづくりの敗北』(文春新書)は、職人的技術への過度のこだわり、全体を見ず局所的な改善ばかり繰り返す近視眼的なメーカーの姿勢を、当初は無敵だった零戦が次第に優位性を失い敗れていった姿に重ね合わせる。サムスン電子の『産業スパイ』疑惑にも詳しく触れられ、激しい情報戦争の一端を知ること出来る。

仏教の核心は「ブツダがかつて覺りを得た」こと。「でもその覺りの内容は覺っていない衆生には分からない」ことだ

とか。橋爪大三郎・大澤真幸『ゆかいな仏教』(サンガ新書)は、ベストセラー「ふしぎなキリスト教」の社会学者コンビが、大胆な仮説と独特の例え話を交えた解説で、仏教に切り込んでいく。

最近よく耳にする「EBM」(根拠に基づいた医療)。根拠に基づかない医療があるのかと首をひねる向きには、津田敏秀『医学的根拠とは何か』(岩波新書)。医学的根拠には、経験則、生物学的な発症メカニズムの研究、統計学的根拠の三つがあることから説き起こし、日本で重視されるメカニズム研究は間接的根拠にすぎず、統計学的根拠を最も重要視するのがEBMなのだと解説する。特に、多数の要素が絡み合い、発症まで長い時間を要するガンは「ある化学物質はガンの発症確率を〇%高める」といった統計に頼らざるをえないと説くが、統計学的根拠が持つある種の「不確実さ」についてはどう考えたらよいのか。究極の複雑系・人体はいまだ我々にとって難題として立ちほだかっている。

一人前の男であることを証明すべく真剣で相手と斬り合う——いつの時代のこ

とかと思われるだろうが、現代ドイツの話である。菅野瑞治也『実録 ドイツで決闘した日本人』(集英社新書)は、十六世紀以来の決闘の伝統がいまも受け継がれていること(あのマルクスやニーチェも斬り合った!)を教えてくれる。

自ら決闘に二度参加した著者の体験談は生々しく、防具や刀剣の図版からはヨーロッパ中世の「高貴な野蠻」が匂う。それにしても決闘を行う学生結社に属する学生がドイツに五万人以上いるとは驚き。「ゲルマン魂」侮りがたし。

土佐生まれ、江戸時代には産地と大都市でしか食されていなかったが、長期保存可能、調理不要なたんぱく質として、西南の役、日清・日露戦争で携帯食糧に用いられ、一気に広まる——宮内泰介・藤林泰『かつお節と日本人』(岩波新書)を読んで驚くのは、この馴染みある食品と戦争との深い関係だ。沖縄、台湾、フィリピン、南洋諸島へと「南進」していく生産拠点と、漁民のドラマも読みどころ。資源問題、日本人のグローバル化まで、かつお節から見えてくる視界は思いがけず広い。

(胡)